

技術士と仏教

技術士 末浪憲一(経営工学)

我が国は仏教国である。科学技術が進んだ現在でも少なからずその影響を受けている。お釈迦様が創始された仏教を普及するのに考え出された手法(分類・層別法など)である。その大きな違いは、分析に数値を使用されていなかったことである。我々の技術士においても技術士倫理綱領の中にその影響を見いだすことが出来る。

1: 観自在菩薩 観世音菩薩

般若心経に出てくる冒頭の言葉

観自在菩薩：解決する問題点をあらゆる角度から注意して観察する。

観世音菩薩：世の中で起きているかすかな音にまで、耳で感ずるほかに目で見て注意して観察する。これらから得られたものを分析し、智慧で対応する。

参考「三現主義とは、現場・現物・現実の3つの「現」を重視する考え方。

あらゆる業種において、必ず現場に行き、現物を見て、現実を知り、机上の空論は否定。不具合現物や発生現場・現実をよく見て問題点を絞り込むのに、新QC7つ道具やQC7つ道具などがある。

2: 菩薩とは：菩提薩埵(悟りを求める人)

本生菩薩：釈尊(お釈迦様)その人の成道以前の修業時代について言う。

高位の菩薩：大乘仏教の修行の階程のなかで、まだ仏に至らないが、かなり高位にあつて、私たちを助けてくださる力のある方。弥勒菩薩は、今、成仏直前の位にあり仏になろうとして修行中、既に人々を救済・教化する多大な活動をしている菩薩。

凡夫の菩薩：大乘仏教では、その教えを理解し信解(しんげ)して、私もこの道を歩んで仏になりたいと決心したら、その人は既に菩薩。覺りを求める心、菩提心を起こした人はすべて既に菩薩である。つまり、大乘仏教徒なら、どんな位にある人でもすべて菩薩であるが、心から菩提心を発すると言うことは、決して簡単なことではない。何か人間を超えるものの存在を確信し、自分の生きる目標は、人々の力となり人々の助けとなることにあると見極めること。他者のために生きるのだと決意することが求められる。このことで、大抵は菩薩の資格を失う。

(信解(しんげ)：仏の教法を聞いてはじめてこれを信じ、その後自分で理解すること

願生(がんしょう)の菩薩：

わざわざ苦しみの多い世界に自ら赴いてまで苦しんでいる人々の力になりたいと、その意志を実現して行かれる方々である。

願生：願って地獄・餓鬼・畜生といった悪趣に生まれると言うこと。

3: 観音様の居場所はどこか。

困りに困ったとき、「念彼観音力(ねんぴかんのりき)」と唱えたとちまち観音様が助けにきてくださることから、観音様は各自の心の奥底におられ、「念彼観音力」の声を聞いて、33体の一つ(慈母?、鬼神?)に変身して、援助に来てくださる。

企業が、技術士に支援を求めるときには、大学や研究所、インターネット等で問題解決に必要な知識は大部分入手している。それでも解決できない問題・課題について支援依頼をしてくる。得られた知識と現場・現物を十分に考察して解決策を熟慮しても解決できないとき、あらゆる考えられるすべての手を総動員しても妙案が浮かばないとき、ふとしたきっかけで、観音様の助けを得ることができる。このことを「悟り」というのか。この支援とはどのようなことか。知でもなく、慧でもなく、・・・ 不思議な力である。私が思いついたこととは考えられない。きっと、私の心の奥におられる観音様の知恵と思うほかない。

頭のなかで組み立てた理路整然としたアイデアの行き詰まりの果てに思いついた、苦しまぎれの最後の悪あがきから生まれたアイデアや工夫；これが「現場」が必要としている「知恵」の実体だと思う。「窮すれば通ずる」という体験が、現場での実践で得られる最も貴重なものであると思う。徹底して困り抜くこと、そこでもがき続けることで考えもしなかった妙案が浮かんでくる。観音様の智慧を頂く事ができる。

4. 分別（ふんべつ）

層別：QC7 つ道具のひとつ。データを年齢別などの同じ共通点を持つグループに分類すること。層別に分けることで、漠然としたデータの特徴がはっきりする。層別に分けたデータの分析に、パレート図やヒストグラムが利用される。

同じ製品を同じ仕様に従って製造する場合でも、製造担当者の癖や、製造機械の整備の具合等で製品の出来映えに差が生じる。製造担当者の癖や、製造機械の整備の程度を層別して比較することで、改善策が見つかる。このことで、これらの要因間の差が無くなるまで努力することで、好ましい状態を実現でき、この段階での層別の意味が無くなる。

分別技術には「検定と推定」「実験計画法」など、最高の状態にする無分別化の技術には「最適計画の諸法」があり、この状態を管理・維持するのに「管理図」がある。けれども、最高の状態（＝無分別状態）に維持することは非常に難しい。今現在、最高の製品であっても、さらに優れた製品が出てこないという保証はない。無常の世界である。

ビジネスの世界では、無分別智と分別智の違いといえ、ものごとを数値化し、切り分けて、ラベリングし、戦略をたて、成功に導くというもので、人間的な分別智の世界である。仏教では、人間が自己中心的に自分のものさしで物事をはかり思い通りにしようとする分別智を捨て、主体・客体を離れた真実の智慧である無分別智（ものごとを分別しないから無分別という）を得ることを目指す。しかし、それは大変な道のりであり、人間が分別智の世界から離れることはかなり難しいのも事実である。無分別智を目指しながらも、やはり人間は分別智の世界を生きなければならない。同じ生きるのであれば、分別智の世界をもう少し住みやすく暮らしやすくする努力もあって良いのではないか。

「分別」という言葉は仏教から生まれ、仏教にとって重要な思想を示す不可欠な用語である。

普通、分別と言え、よい意味では「分別がある」「分別盛り」といわれ、それは物分りのいい人という意味であり、悪い意味では「分別くさい」「分別顔」といわれ、それは嫌な奴という意味あい使われている。しかし、悪い意味での使われ方は、分別

のあることを自慢する場合であって、分別という言葉それ自体はよい意味で用いられている。世間の常識に基づいて、事物の善悪や正邪や、条理をきちんとわきまえ、その識見に基づいた判断をするとき、分別があるといわれ、世間の常識からはずれると、分別がないと批判されたりする。従って、分別は世間においては必要なのである。

ところが、仏教では、この分別がくせ者であり、仏道の障りとされる。「虚妄分別」（邪まな世界を作り出す分別）という言い方に代表されるように、この分別によって、私たちに苦悩が生まれるというのが、仏教の考え方である。仏教にとって分別とは、認識主体と認識対象を分け、認識主体を「我れ」として固執（我執）し、認識対象を「我がもの」として固執（我所執）することである。この分別によって、自己中心的な固執が生まれ、それによって苦悩が生まれる。仏教では「煩惱は分別によって生まれ、分別は戲論（言葉によって固執の世界を虚構すること）によって生まれる」と説かれる。私たちの世界は言葉によって虚構され、その虚構によって自己と自己の所有に対する固執が生じ、勝れた他と比較して劣等感を抱いたり、劣った他と比較して優越感を抱いたりする。その分別によって煩惱（苦悩）が生まれる。

人間は善悪・正邪の分別なしでは生きられないが、その分別によって人間は苦悩する。そうした分別の本質が明らかになるとき、分別は分別のままにそれに固執しない智慧の世界が開かれる、それを「無分別智（分別を超えた智慧）」という。それは分別のない世界ではなく、分別の本質を知見し、分別が障りとならなくなる世界である。

5. 自利と利他

自利：仏語。仏道修行を行なったその功德・利益を自分一人で受け取ること。

原始仏教では、この世の中は思い通りにならないことが多すぎる。思い通りにならないことが苦となる。苦から逃れるために修行した。出家し修行した人のみが苦から逃れることができた。通常、自利の後で利他に向かう。

利他：大乘仏教では、自分を犠牲にして、他人の益のために尽くすこと。

技術士倫理綱領には、般若心経で説かれるようなことが示されている。

1. 公衆利益の優先：技術士は、公衆の安全、健康および福利を最優先に考慮する。
3. 有能性の重視：技術士は、自分の力量が及ぶ範囲の業務を行い、確信のない業務には携（たずさ）わらない。

とされているが

8. 相互の協力）の項で、技術士は、相互に信頼し、相手の立場を尊重して協力するよに務める。

関係する分野の技術士の協力で多分門にまたがり、単独分野の技術士で対応不可能な業務であっても、対応可能となる。と考えたい。

このようなことから、技術士の基本的な考え方の中にも、仏教の影響を受けている。

6. 企業支援の経験

企業から支援依頼を受けたとき、企業責任者との初対面、そのときの第一印象が大切である。和やかな雰囲気作りに努めること。依頼先の企業の商品群について、開発時の苦労話を聞くのも有効な方法である。続いて今回の依頼内容について説明を受ける。こ

の段階で、この企業が抱えている問題点についておおよそを知ることができるが、可能な限り企業が取り組んだことを聞き出すこと。できる限りの解決策について検討したが、それでも解決できなかった課題について依頼されたということを忘れないで。観世音菩薩になりきること（三現主義）が大切。

なぜこのように簡単なことを理解してくれないのかと考えることがしばしばある。このようなき、わかりやすく専門用語を使わずに根気よく説明できること。

人を見て法を説け：人を見て法を説けとは、人に何かを説いたり論したりするときは、相手の性格や気質を考慮して、適切な言い方をすることが必要だという教え。

釈迦が仏法を説くにあたり、相手の気質や状況などを考えて、それぞれにあったやり方で行ったという説話から。例え話など。

7. 企業の基本は「利他行」

現在の企業経営では、大乘仏教の特長である民衆に益と安楽をもたらす「利他行」が重視されるようになってきていると思う。企業の評価は、「利他行」の結果＝人のためにつくし、社会へ価値を生み出した程度（徳と得）である。社会に与えた益の額に応じてその企業の益（得）が決まる。この場合の益は、狭い金銭的な益だけではない。社会文化向上の貢献度に応じて企業の社会的信頼度（徳）が決まる。企業の関係者は、それらを自らの喜びとし、また成長の礎とすることが、企業力になっている。

顧客と企業の信頼関係が密接になった結果、顧客が製品を特徴付ける有益な改善点や、新製品開発の方向付けを企業に与えてくれる。このように企業と顧客の強い信頼関係が企業の成長を促し、さらに企業は、成長できる。

8. すべては無常の世界

すべては無常に支配されている。昨日まで、経営を支えていた優秀な商品群が、今日・明日も優れた商品であり続ける保証はどこにもない。各社は、商品政策と結びつけて他社よりも優れた商品開発にしのぎを削っている。このような中であっても、企業を取り巻く周囲から、あらゆる情報を吸収した智慧で改革に成功した企業が伸びている事も事実である。この状態を持続させることは困難である。忍び寄る「煩悩」と「無明」の結果で知らない間に、当初の緊張感が薄れてしまって、社会から見放された企業は、衰退に向かう。一部では、企業30年説が言われている。このような場合にも「般若心経」は、解決策を教えてくれている。「八正道」と「四諦」である。組織に所属する一人一人の心の持ち方である。もう一度「般若心経」を読誦してみよう。

参考文献など

- 1 「般若心経を読み解く」 竹村牧男著 大東出版社 平成15年7月30日発行
- 2 「中村元の仏教入門」 中村 元著 春秋社 2015年2月1日 第2版
- 3 「ブツダの生涯」 前田専學監修 岩波書店 2014年7月25日第14刷発行
- 4 「般若心経」 佐々木閑著 NHK出版 2014年1月25日第1刷発行

参考

「四苦八苦」：人が生きる上で避けては通れない〈苦〉の種類

(①～④までを、人生の大きな四つの苦しみと言うことで「四苦」と言う。)

- ① 生(しょう)：生まれる苦しみ。これはインド人的発想で、苦しみの多いこの世に生まれてくることは「苦」であると言うことである。
- ② 老(ろう)：老いていく苦しみ。
- ③ 病(びょう)：病にかかる苦しみ。
- ④ 死(し)：死ぬという苦しみ。人間には100%死が訪れる。

(⑤～⑧までの四つの苦を加え、あわせて「八苦」。(「四苦八苦」の語源)

- ⑤ 愛別離苦(あいべつりく)：愛するものと別れる苦しみ。
- ⑥ 怨憎会苦(おんぞうえく)：怨み憎む者と会う苦しみ。
- ⑦ 求不得苦(ぐふとっく)：求めても得られない苦しみ。
- ⑧ 五蘊盛苦(ごうんじょうく)：五蘊のこだわりの苦しみ。簡単に云うと、人間の五官で感じるものや心で感じる人間の肉体や精神活動すべてが物事にこだわりをつくる苦しみ。例えば、よい景色を見たい、よい音楽を聴きたい、よい香りを嗅ぎたい、美味しいものを食べたい、楽をしたいなど。これらの割愛はきりが無く苦の原因となる。

「八正道」：一般人の生存は苦であり、その苦の因は妄執によって起るのであるから、妄執を完全に断ち切れれば完全な悟りを得ることができると考え、その状態に到達するための修道法として説かれた8種の正しい実践法という

- ① 正しい見解(正見)：苦しみに関する知。苦しみの生起の原因に関する知。苦しみの消滅に関する知。苦しみの消滅に導く道に関する知。
- ② 正思(正しい思惟)：出離の思い、悩みや煩いから逃れたいという思い、怒らない思い、他者を傷害しない・傷つけないという思い。
出離：仏語。迷いの境地を離れること。迷いを脱するために仏門にはいること。
- ③ 正語(正しい言葉)：虚言を成さない、うそを言わない、人を謗(そし)つてはいけない、荒々しい言葉を発しない、戯言(ぎげん)を言わない、冗談を言って人をからかうことはしない。
- ④ 正業(正しい行為)：生き物を殺さない、盗みをしない、欲情に関するよこしまな行為をなさない、男女関係を乱さない。殺・盗・淫の三つを断つことを教えている。
- ⑤ 正命(正しい生活法)：信徒がよこしまな生活法を捨てて、正しい生活法に則った生活を営むこと。当然他人を傷つけないで生きることには帰着する。
- ⑥ 正精進(正しい努力)の精進とは、努め励むこと。正しい努力とは、修行僧がすでに起こった邪悪な事柄を断つために、また、未だ起こらぬもろもろの善なる事が起こるように、また、既に起こった善の事柄が持続し、散乱せず増大し、盛んになり、修養し完全ならしめるために意欲を生じ、努力して努め励むこと
- ⑦ 正念(正しく念ずる)：念とは心にじっと思い浮かべること。あるときは、仏様の姿を思い念ずるようになり、仏像ができる。
- ⑧ 正定(せいじょう)：正しい精神統一、あるいは禅定。精神統一とかを禅定という。平和、安らぎへの道。心が落ち着いてくると人はとげとげした気持ちもなくなり、争い

もなくなる。人は、我執を離れると心が平静になれる。そうすると心の平静が我が物となり、真理を観じることもできるようになる。

2022. 03. 09

「公益社団法人日本技術士会近畿本部登録近畿 PE 技術相談室
<https://kinki-pe-sodan.com>